

令和 1 年 10 月 6 日

若手研究者海外挑戦プログラム報告書

独立行政法人日本学術振興会 理事長 殿

受付番号 201980113

氏 名 石川 めいみ
(氏名は必ず自署すること)

若手研究者海外挑戦プログラムによる派遣を終了しましたので、下記のとおり報告いたします。
なお、下記記載の内容については相違ありません。

記

1. 派遣先：都市名 カンザス州ローレンス (国名アメリカ合衆国)
2. 研究課題名（和文）：日英母語幼児と大人を対象とした受身文に対する文産出と理解の比較研究
3. 派遣期間：令和 1 年 5 月 2 日 ～ 令和 1 年 9 月 8 日 (130 日間)
4. 受入機関名・部局名：カンザス大学言語学科
5. 派遣先で従事した研究内容と研究状況（1/2 ページ程度を目安に記入すること）

派遣先では、3つの研究プロジェクト A, B, C を立ち上げた。プロジェクト A では、様々な動詞とそれらを用いた能動文または受身文に対して、成人日本語母語話者がどれくらい「動作主の行為が被動作主（あるいは affectee/experiencer）に与える影響」に意味的な違いを持っているのかを調査した。Pinker (1989) の Semantic Affectedness に基づけば、例えば、他動詞であっても「蹴る」と「撫でる」では、意味的にそれらの行為が被動作主に与える negativity は異なると考えられる（英語母語話者を対象とした先行研究, Ambridge et al., 2016）。本調査では、様々な他動詞文に加え「A が B に泣かれる」のような自動詞受身文に対する negativity の程度も調査した。日本語を母語とする成人と幼児を対象とした Syntactic Priming 実験では (Ishikawa&Goro 2013, 2017) 被験者に他動詞を用いた能動文を聞かせた後よりも他動詞受身文を聞かせた後のほうが有意な差で他動詞受身文の産出率が高く (Priming 効果)、さらに自動詞受身文を聞かせた後の他動詞受身文の Priming 効果も他動詞受身文を聞かせた後と同程度であった。これまでの Syntactic Priming 研究では、Priming 効果が見られた場合、産出直前に聞いた文と産出文に対する統語構造を共有していると解釈されてきた。しかし、Ishikawa&Goro の実験では、統語構造が異なる受身文（他動詞受身と自動詞受身）を用いたことから、この実験による Priming 効果が統語構造によるものなのか、他の要因によるものなのか結論を提示できていない。この実験結果による Priming 効果は、動詞の種類に関係なく「受身文」が持つ被害感 (affectedness/negativity) によるものである可能性もある。

そこでプロジェクト B では、プロジェクト A で得られた調査結果を元に、negativity の程度が高い動詞と低い動詞を用いた Priming 実験を計画している。もし、動詞の negativity の高さが受身文の Priming 効果に影響しているなら、negativity の高い動詞を用いた受身文を聞いた後のほうがより Priming 効果が高くなることが予測される。また、成人と幼児の priming 効果と動詞の negativity

とに相関が見られるかどうかを検証することによって、幼児の受身文の形式（文法）の獲得だけでなく、その形式が負う意味の獲得に関する示唆も提示できる可能性が期待される。

さらに、プロジェクト C では、幼児の Priming 効果と語彙習得レベルとの相関関係を探る。この相関関係は、私の知る限り通言語的にほとんど研究がなく (Messenger2009) 日本語のデータから新たな知見を提供できる可能性が期待される。

各プロジェクトについての進捗は次の通りである。プロジェクト A は調査が完了し現在分析を進めている。プロジェクト B と C は実験計画を進めており、準備が整い次第実験を実施する予定である。

6. 研究成果発表等の見通し及び今後の研究計画の方向性（1/2 ページ程度を目安に記入すること）

プロジェクト A の成果発表については、International Association for the Study of Child Language (IASCL) 2020、あるいは Architectures and Mechanisms for Language Processing Asia (AmLaP) 2020 への応募を検討している。

プロジェクト B と C の実験結果の成果発表については、今後の実験実施の状況（実験協力先の保育施設の都合など）によるところが大きいものの、現在のところ Generative Approaches to Language Acquisition - North America 9 (GALANA 9)、あるいは Boston University of Child Language Development 2020 (BUCLD) への応募を検討している。

7. 本プログラムに採用されたことで得られたこと（1/2 ページ程度を目安に記入すること）

中長期的な留学経験がなかった私にとってすべてが初めての経験で、ビザの取得、住まいや家具の賃貸契約、wi-fi や携帯などの通信環境整備、現地での娘の保育施設の検討から入園交渉など、まず渡米前に生活環境を整えておくための多くの複雑な手続きを英語で進めることは、とても貴重な経験であった。さらに現地では竜巻の発生にも巻き込まれた。指導教員から、竜巻発生もあり得ることや避難のアドバイスを事前に受けていたので、素早く地下シェルターに避難することができ、幸い自宅には被害がなく滞在していた町も小さな被害で済んだものの、滞在する国や地域によって事前に知っておくべき防災知識や対策が変わってくることを身を以て体験し、人生にとって大きな学びとなった。また現地での生活では、受入教員をはじめ、現地邦人の方々、近所の方々、他国からの Visiting Scholar の方々など、多くの方に親切にいただいた。見知らぬ土地で見知らぬ人同士が友人となり互いに助け合っていくことの力強さを強く感じた。

研究面では、プロジェクトを進めるにあたり Qualtrics というアンケート作成ソフトの使い方を習得することができた。また成人と幼児の眼球運動の実験演習に参加することができ現場で学ぶことができた。大変有意義な経験になったのは、ヒトを対象とした実験を実施するにあたり必ず研究に関わる学生・教員が受講しなければならない講習 (CITI Program)、大学の審査委員会 (IRB) によるプロジェクトの審査である。日本では、幼児を対象とした言語研究において幼児（あるいは代理の保護者）の人権保護過程が曖昧で、大学により基準が大きく異なっている現状がある。講習を受け実際に審査書類の準備から携わらせてもらうことができ、日本における言語研究においても被験者の人権保護に対して一定基準を持って審査を実施する土壌が広がることは非常に重要なのではないかと感じた。プロジェクト進行においては、受入教員が毎週 2 回の打ち合わせ時間を確保してくださり、多くの時間と熱意を本プロジェクトに割いてくださったことには深謝している。博士論文についても貴重なアドバイスと励ましをくださり、研究発表の機会を 2 度もご用意くださった。このトーク準備も熱心に指導してくださり、また院生も多くのアドバイスをくれた。通常の学会発表の倍以上の持ち時間がある talk の準備はとても大変だったが、だからこそ貴重な経験と学びの機会になった。この滞在をきっかけに指導教員との共同プロジェクトを今後も継続していける地盤を整えることができ、またカンザス大学言語学科には継続して Adjunct Researcher として所属できることに感謝している。指導教員の Prof. Utako Minai をはじめ、私の滞在にお力添えくださったすべての方々、そして本プログラムに心から感謝している。